

# 悠久の河

16

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

## 別れ

「さあ、早くしろ、負ってやる。恥ずかしくなど無い。ゆうは、病気なんだ。兄貴に負われるのには、これが最後かも知れないぞ。今からは、何か有つたら五郎太がゆうを負うだろう」  
ゆうは少し戸惑つたが、勘六の背にそっと体を預け恥ずかしそうに肩のあたりに顔を付けた。

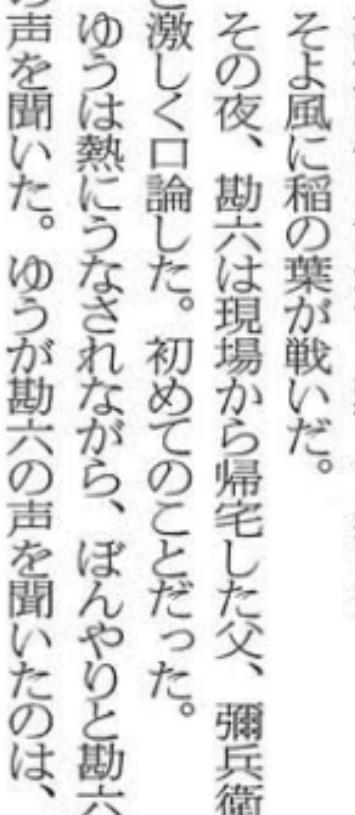
「お兄さまの背中、温かいわ。昔と同じ。ゆうが村の子どもたちにいじめられて泣いていると、お兄さまが、いつも負ってくれたわ。思ひ出しちゃった」

勘六は何も言わず、黙つて歩いた。  
そよ風に稻の葉が戦いだ。

その夜、勘六は現場から帰宅した父、彌兵衛と激しく口論した。初めてのことだった。  
ゆうは熱にうなされながら、ほんやりと勘六の声を聞いた。ゆうが勘六の声を聞いたのは、ながら、口に出すことは出来なかつた。

それが最後となつた。

勘六が父の彌兵衛と口論した揚句、家を出でから一週間が過ぎた。その間も、彌兵衛は何事も無かつたように川普請の現場に通い続けた。サトもクニも、心の中では勘六のことを案じながら、口に出すことは出来なかつた。



画 高田勲

ゆうの熱は相変わらず続き、ゆうが勘六の家出を知つたのは、十日も経つてからのことだつた。  
—お兄さまは、あの時、もう家を出ることを決意していたのかもしれない。どこへいらしたのかしら。でも、あの思慮深いお兄さまのことだから、無謀なことはなさらないわ。お兄さまにも、きっとお父さまのお心の内が解る日が来るわ。—

ゆうは、不安な気持ちを撥ね除けるように、自分に言い聞かせた。周藤家の誰もが、勘六の家出を外の人々に知られてはならないと、申し合わせたように口を噤んだ。

そんな折、松江藩の家老、三谷権太夫が出雲地方を視察して歩くことになつた。  
宝永五年（一七〇八年）のことである。  
視察は、農民たちの生活の様子や稻の出来具合、災害後の復旧工事等を見て回ることが目的だつた。

権太夫は日吉村にも立ち寄り、ぜひ彌兵衛の工事現場を見たいと所望した。

「この時期に、自分の身代を投げ打つてまつつの村と民を救おうとする彌兵衛なる者、大氣者よのお。天晴な行いぞ。早く工事現場を見たいものだ」

権太夫は日吉村の川普請の現場に着くまでに、何度も御付の者に呴いた。一方、日吉村の現場では、御家老さまの視察とあって、彌兵衛をはじめ、人たちも無礼が有つてはならぬと、手を休め、頭を下げる、松江藩家老の三谷権太夫を迎えた。

「普段通りの姿が見たいぞ。わしが居ることを意識せず、どんどん仕事を致せよ」

■ クラウドのさきがけ——総合水管理システム「やくも水神」の小松電機産業 提供